Ⅲ 国語科における実践事例

事例１　ノート・ワークシートを用いた「国語総合」の指導
～ 故事成語を学習材として ～

１ ねらい

この実践では漢文入門期の１年生を対象として、読む能力の育成を中心とした指導を行った。

新学習指導要領の「国語総合」の指導事項「Ｃ　読むこと」の「(1)イ　文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。」を指導の中心に取り上げる。「国語総合」の「Ｃ　読むこと」の「(2)エ　様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。」を参考にして設定した、「孟子の思想と恵王の思想を比較しながら、孟子の考え方に対して自分なりに考えたことを書く」という言語活動を通して、文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりするための言語能力を育成する。

学習評価の場面では、授業後に教師が確認しながら評価を行えるような方法（ノート・ワークシートへの記述の確認）と、授業中の見取り（行動の観察、ノート等への記述の点検）を取り入れた。

２ 学習活動の概要

(1) 単元名　故事成語　－「五十歩百歩」－

(2) 単元の目標　※「五十歩百歩」では、以下に示した「関心・意欲・態度」「読む能力」の目標のうち、下線を付した部分を指導する。

① 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりしようとする。（関心・意欲・態度）

② 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりする。（読む能力）

③ 文語のきまり、訓読のきまりなどを理解する。（知識・理解）

(3) 単元の目標を指導するために取り入れる言語活動

孟子の思想と恵王の思想を比較しながら、孟子の考え方に対して自分なりに考えたことを書く。

(4) 授業で実際に用いる具体的な評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
語句や表現に注意して文脈を捉え、書き手の考えなどを正確に読み取ろうとしている。	語句や表現に注意して文脈を捉え、書き手の考えなどを正確に読み取っている。	漢文を読んだり、書き下し文を書いたりするための基本的なきまりを理解している。

(5) 指導と評価の計画（全３次　５時間）

次	学習活動	指導上の留意点	具体的な評価規準と評価方法
1【1時間】	**●訓読のきまりに従って本文を正しく音読する。** (1)教科書の本文の横に、訓読する順序を算用数字で記入する。 (2)二人組になり、訓読する順序を確認する。 (3)教師の範読を聞く。 (4)各自で読みの練習をする。 (5)二人組になり、互いに正しく読めているかを確認する。〔ワークシート①(資料１)〕	○置き字には、読み順の数字は入れず、代わりに印を付けさせる。 ○漢字の読みを確認させる。読めない字には読み仮名を記入させる。 ○読めない字を書き出させる。うまく読めなかった場合にはもう一度練習させる。	**知識・理解** ○漢文を読むための基本的なきまりを理解している。（記述の点検）〈場面1〉 **知識・理解** ○漢文を読むための基本的なきまりを理解している。（ワークシート①への記入内容の確認）〈場面２〉
2【2時間】	**●書き下し文のきまりを確認しながら、書き下し文をノートに書く。** (1)ノートに本文を写し、置き字、助詞、助動詞に印を付ける。書き下し文をノートに書く。 (2)自分の書き下し文を必要に応じて訂正する。	○書き下し文を書く際のきまりを確認させる。 ○書き下し文を訂正する際は、自分の書いた書き下し文は消さず、二重線を引いてその横に正しいものを書き入れるよう指示する。	**知識・理解** ○漢文を読んだり、書き下し文を書いたりするための基本的なきまりを理解している。（ノートへの記述の点検、行動の観察）〈場面３〉 **知識・理解** ○漢文を読んだり、書き下し文を書いたりするための基本的なきまりを理解している。（ノートへの記述の確認）〈場面４〉
3【2時間】	**● 本文を正しく読み取り、孟子の主張を理解する。** (1)語句の意味や句形を教科書の脚注や便覧で確認しながら、本文を現代語訳する。また、本文中の比喩が何を喩えているのかをノートに書く。 (2)孟子がこの話を通して伝えたかったことはどういうことかを考える。〔ワークシート②(資料２)〕 (3)孟子の思想について自分なりに考えたことをまとめる。〔ワークシート②(資料２)〕 (4)「五十歩百歩」という言葉が現在どのような意味で用いられているかを確認する。	○現代語訳を訂正する際は、自分の書いたものは消さず、二重線を引いてその横に正しいものを書き入れるよう指示する。 ○机間指導を行いながら適宜助言する。 ○孟子の思想と恵王の思想を比較した上で書くように指示する。	**読む能力** ○語句や表現に注意して文脈を捉え、書き手の考えなどを正確に読み取っている。（ワークシート②への記述の確認）〈場面５〉 **関心・意欲・態度** ○語句や表現に注意して文脈を捉え、書き手の考えなどを正確に読み取ろうとしている。（ワークシート②への記述の確認）〈場面５〉

3 授業の様子

【第１次】 漢文訓読のきまりに従って本文を正しく音読する。

「五十歩百歩」は、訓読のきまりを学習した後に初めて扱うまとまった文章であった。そのため、第１次では、生徒が漢文を訓読をする際のきまりをきちんと理解できるよう、丁寧な授業展開を心がけた。

第１次は１時間をかけて展開した。まず、教科書の本文の横に、訓読する順序を算用数字で記入させた。その際、置き字には番号を付けなくてよいと指示をした。生徒が読み順を書き込んでいる時に机間指導を行い、知識・理解の観点における生徒の学習の実現状況がどのようであるのかを見るために、「漢文を読むための基本的なきまりを理解している」という評価規準に基づき、生徒の記述を点検した。具体的には次のように行った。

○「２(5) 指導と評価の計画」における〈場面１〉… 授業時

訓読する順序を正しく理解しているかどうかを、机間指導をしながら、生徒が教科書に書き込んだ数字を点検することによって見取った。 〈「知識・理解」の観点からの見取り〉

生徒の状況

生徒たちは５分くらいで番号を付け終わった。生徒の全員が、読み順に従って数字を書き込むことができていた。

次の学習（読み順の確認）へ進めることにした。

席が近くの生徒と二人組になり、読み順を確認させた。その後で、教師が本文を範読した。生徒には本文を目で追わせ、読めない字には読み仮名をふらせた。

各自で音読練習をさせた後に、白文に送り仮名と返り点のみを付したワークシート①（資料１）を用いて、語句の読みを定着させるための音読練習を行った。机間指導をしながら生徒の練習の様子を観察し、読めない字があるという生徒には個別に指導した。

十分に練習ができた頃を見計らい、生徒同士を再度二人組にしてワークシート①を交換させ、交代で読みの確認テストを行った。授業の最後にワークシート①は回収した。

知識・理解の観点における生徒の学習の実現状況がどのようであるのかを見るために、「漢文を読むための基本的なきまりを理解している」という評価規準に基づき、授業後にワークシート①への記入内容を確認した。具体的には次のように行った。

○「２(5) 指導と評価の計画」における〈場面２〉… 授業後

訓読する順序に従って正しい読み方で音読ができているかどうかを、ワークシート①の「Ⅰ」と「Ⅱ」への記入内容を確認することによって見取った。 〈「知識・理解」の観点からの見取り〉

生徒の状況

40名の生徒のうち、22名は「Ⅱ（どこも訂正せずにすべて読めた)」であった。また、「Ⅰ（読み方を直してあげたところがあった）」への記入内容により、訓読する順序が分からない状態の生徒はいないものの、クラスの約半数の生徒が、何らかの字を正しく読めていなかったことが分かった。

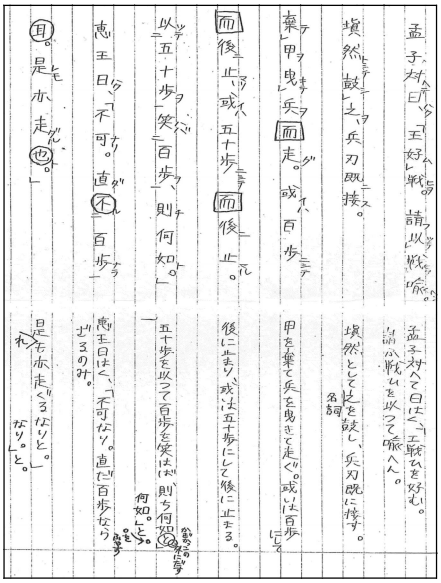
事例実践校においては、間違いが５箇所以内におさまっている生徒を「おおむね満足できる」況（B）と判断した。また、一箇所も間違えずに読めた生徒は「十分に満足できる」状況（A）と判断した。「努力を要する」状況（C）と判断した生徒には、自分が読めなかった語句の読

みを復習した後で、もう一度確認テストで使ったプリントを用いて音読ができるかを試してみるように促した。

今回の見取りの結果を踏まえ、第２次の授業の冒頭では、クラス全体に対して本文の読み方の復習を行うことにした。

【第２次】 書き下し文のきまりを確認しながら、書き下し文をノートに書く。

ここは２時間をかけて展開した。まず、復習として、前時のワークシート①より、特に生徒が正しく読めていなかったと思われる語句の七つ（「何如」「喩」「亦」など）を黒板に書き出し、読めるかどうかを確認させながら、再度読み方を指導した。第１次に「努力を要する状況」（C）と判断した生徒にも指名をしたが、その生徒たちは読み方を答えることができていた。



生徒のノート例①

前時の復習の後、ノートに本文を写させた。そして、書き下し文のきまりを再度確認した。特に、置き字、助詞、助動詞に注意させるため、ノートに写した本文中の置き字を□、助詞と助動詞は〇で囲ませてから、ノートに各自で書き下し文を書かせた（「生徒のノート例①」参照）。生徒にとって、まとまりのある文章を書き下し文にしていくことは初めてのことであったが、大変意欲的に取り組んでいた。

生徒が書き下し文を書いている時に机間指導を行い、知識・理解の観点における生徒の学習の実現状況がどのようであるのかを見るために、「漢文を読んだり、書き下し文を書いたりするための基本的なきまりを理解している」という評価規準に基づき、生徒のノートの点検や、生徒の行動の観察を行った。具体的には次のように行った。

〇「２(5) 指導と評価の計画」における〈場面３〉… 授業時

置き字、助詞、助動詞を正しく理解しているかどうかを、生徒がノートの白文に付した符号（〇や□）を点検することによって見取った。また、書き下し文を書くためのきまりを理解してない生徒がいないかどうかを、生徒が書き下し文を書く様子を観察することによって見取った。

〈「知識・理解」の観点からの見取り〉

生徒の状況

〇や□の符号を正しく付けていない生徒が数名いた。書き下し文の書き方自体が分かっていないという生徒はいなかった。

〇や□の符号を正しく付けていない生徒には個別に指導した。

その後、生徒数名を指名し、黒板に書き下し文を書かせた。そして、黒板に書かれた書き下し文と比較しながら、各自のノートを適宜訂正させた。その際、生徒一人一人の学習の状況が分かるように、自分が間違えた箇所は消さずに二重線を付し、その横に正しいものを書くよう指示をした。

知識・理解の観点における生徒の学習の実現状況がどのようであるのかを見るために、「漢文を読んだり、書き下し文を書いたりするための基本的なきまりを理解している」という評価規準に基づき、授業後にノートへの記述の内容を確認した。具体的には次のように行った。

○「２(5) 指導と評価の計画」における〈場面４〉… 授業後

書き下し文を書くためのきまりを理解しているかどうかを、ノートの書き下し文を確認することによって見取った。 〈「知識・理解」の観点からの見取り〉

生徒の状況

40名の生徒のうち、25名は全て正しく書き下し文を書くことができていた。それ以外の生徒は、書き下し文を書く際に、歴史的仮名遣いや句読点に関する間違いをしていた。また、訂正すべきところがあるのに正しく訂正できていなかった生徒が数名いた。

事例実践校においては、生徒の間違いの内容を「歴史的仮名遣いに関するもの」「書く順序に関するもの」「送り仮名に関するもの」と項目別に分け、間違いが２項目以内であった生徒を「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。全く間違えずに書き下し文が書けた生徒は「十分に満足できる」状況（A）と判断した。「努力を要する」状況（C）と判断した生徒には個別に指導した。

今回の見取りの結果を踏まえ、第３次の授業の冒頭では、書き下し文にどのような間違いが多く見られたのかを例示し、再度書き下し文の作り方のポイントを復習することにした。

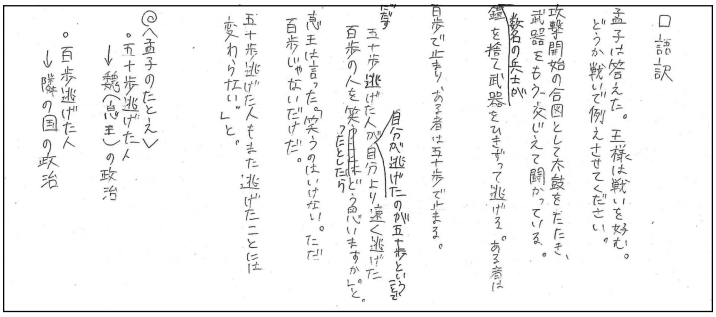
また、この次の漢文を扱う単元では、書き下し文を書かせる際に、今回の見取りの状況（このクラスでは、書き下し文を書く際に、歴史的仮名遣いや句読点に関して間違いをしていた生徒が多いということ）を念頭に置き、指導する予定である。

【第３次】 本文を正しく読み取り、孟子の主張を理解する。

ここは２時間をかけて展開した。

まず、前時の復習として、書き下し文においてどのような間違いが多く見られたのかを例示し、再度書き下し文の作り方のポイントを復習した。その中で、本文中に出てくる置き字、助詞、助動詞それぞれの働きについても再度説明しながら、第３次の授業（本文の読み取り）への導入とした。

前時の復習の後、教科書の脚注や便覧を参考にしながら自分の力でできるだけ現代語訳をしてみるよう指示したところ、書くことを躊躇している生徒はあまり見られず、意欲的に訳をノートに書いていた。


口語訳
孟子は答えた。王様は戦いを好む。
どうか戦いで例えさせてください。
攻撃開始の合図として太鼓をたたき、武器をもち交じえて闘っている。
数名の兵士が鎧を捨て武器をひきずって逃げる。ある者は百歩で止まり、ある者は五十歩で止まる。
自分が逃げたのが五十歩と言って百歩の人を笑うのはどうでしょうか。
五十歩逃げた人が百歩より遠く逃げたことだけだ。
梁王は言った。笑うのはいけない。ただ百歩じゃないだけだ。
五十歩逃げた人もまた逃げたことには変わりない。と。
◎〈孟子のたとえ〉
・五十歩逃げた人
↓
魏(梁王)の政治
・百歩逃げた人
↓
隣の国の政治

生徒のノート例②

その後、生徒を指名して適宜答えさせながら、クラス全体で現代語訳の確認をした。その際、自分が間違えた箇所は消さず、二重線を付したり、補足したりするようにさせた(「生徒のノート例②」参照)。また、本文中の比喩が何を喩えているかについても、自分で考えてノートに書くよう、指示をした。

その後でワークシート②（資料②）を配布し、「孟子がこの話を通して恵王に伝えたかったことはどんなことか」「孟子とはどんな人か。孟子の理想の国家とは」「感想（恵王の思想と孟子の思想を比較して)」の３点を記述させた。読む能力、及び関心・意欲・態度の観点における生徒の学習の実現状況がどのようであるのかを見るために、読む能力においては「語句や表現に注意して文脈を捉え、書き手の考えなどを正確に読み取っている」、関心・意欲・態度においては「語句や表

現に注意して文脈を捉え、書き手の考えなどを正確に読み取ろうとしている」という評価規準に基づき、授業後にワークシート②への記述を確認した。具体的には次のように行った。

○「２(5) 指導と評価の計画」における〈場面５〉… 授業後

たとえ話を通して、孟子が「恵王の政治と隣国の政治はたいして変わりがない」と述べていることを読み取っているかどうかを、ワークシート②「問①」への記述を確認することによって見取った。

〈「読む能力」の観点からの見取り〉

生徒の状況

全員の生徒が、「魏の政治と隣国の政治はたいして変わりがない」という旨をまとめていた。

事例実践校においては、全員を「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。

○「２(5) 指導と評価の計画」における〈場面５〉… 授業後

本文の内容やたとえ話を通して孟子が述べていたことを自分で読み取ろうとしていたかどうかを、ワークシート②「問③」への記述を確認することによって見取った。

〈「関心・意欲・態度」の観点からの見取り〉

生徒の状況（生徒が書いた例）

・孟子の王道政治は仁義をもって天下を治めるというやり方であり、戦国時代だと少し効率が悪い。一方、恵王の覇道政治は戦って国力を増すという単純な方法であり、比較的行いやすいだろうが、最終的に人民がついてこなくなると思う。だから、自分としては覇道政治より王道政治の方が、結果的には長く天下を治められると思った。

・孟子と恵王の考えの違いは、人としての生き方の違いであり、今でもこの二つ考えは残っていると思う。現代でも、すべての国が孟子の考え方になれば、本当に平和になると思う。

・恵王が民に認めてもらうには、孟子の言うとおり、人民の幸せを第一に考えるべきだと思う。権力や武力で天下を治めるのは良くない。

・国を治めるには、国民のことを考えながらも、時には非情さも必要だ。孟子と恵王の間くらいがよい。

事例実践校においては、本文の内容やたとえ話を通して孟子が述べていたことに言及しながら自分なりの感想をまとめていた生徒を、「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。また、孟子と恵王の思想を比較し、それぞれの思想に対して自分が考えたことを付け加えたり（上記「生徒の状況（生徒が書いた例)」の波線（〜））、現代社会に生きる自分の視点からそれらの思想を捉え直したり（上記「生徒の状況（生徒が書いた例)」の二重線（═））していた生徒を、「十分に満足できる」状況（A）と判断した。「努力を要する」状況（C）と判断した生徒への指導も兼ね、次時のはじめに、孟子と恵王の考え方を黒板に整理し、（A）や（B）と判断した生徒が記述した内容をいくつか取り上げて紹介した。

４ 実践を振り返って(授業者の所感)

・評価について意識することが、授業のねらいと手段を明確にすることにつながった。

・授業のねらい、手段、評価規準を明確にして授業に臨むことで、授業の内容が精選され、焦点が明確な授業を展開することができた。このことが、教師自身の授業改善に役立った。同時に、生徒にとっても、わかりやすい授業となったように感じた。

使用教科書等

・『高等学校標準国語総合』(第一学習社)

・『カラー版新国語便覧』(第一学習社)

ワークシート①

資料１

「五十歩百歩」音読練習用プリント　一年　組　番（　　）

・ペアになって音読の確認をしよう。漢文のふりがなは除いてあります。

五十歩百歩

戦国時代の中ごろ、各国は富国強兵を競っていた。孟子が梁の恵王を訪れたところ、王は、「私はわが国を強くするために心を尽くした政治をしているが、隣国は何の努力もしていない。それなのに国力に差がつかないのは、どうしてであろうか。」と尋ねた。孟子は次のように答えた。

①孟子対曰「王好レ戦。請②フ以レ戦喩。③塡然鼓レ之、兵刃既④接。⑤棄レ甲曳レ兵而走。⑥或百歩而後止、或五十歩而後止。⑦以二五十歩一笑二百歩一、則何如。」

⑧恵王曰「不可。⑨直不二百歩一耳。⑩是亦走也。」

すらすら読めたかな？うまく確認できたかな？〈ペアの相手と互いに読めたかどうか確認しよう〉

評価者

Ⅰ　読み方を直してあげたところがあった。（どちらかに○）

読み方を教えてあげた字	，　，　，
読み方を直してあげた文	番号
その他指摘してあげたところ	

Ⅱ　どこも訂正せずにすべて読めた。

ワークシート②

資料２

「五十歩百歩」まとめのワークシート　一年　組　番（　　）

問①　孟子がこの話を通して恵王に伝えたかったことはどんなことか。

問②　孟子とはどんな人か。孟子の理想の国家とは。↓便覧ｐ３３８　参照

⑨　感想　〈恵王の思想と孟子の思想を比較して〉

事例１におけるポイント

１ 評価に関する工夫

○ 指導から評価へ、評価から指導へとつなぐ

「指導」→「評価（生徒の学習状況の見取り）」→「（評価を踏まえた）次の指導」とつないでいくことで、生徒が着実に力を付けていく授業は実現する。

指導から評価へ、そして、評価から指導へとつなぐことにおいては、「１時間の授業時中で、指導から評価、評価から指導へとつなぐ」「一つの授業の中で行った指導（評価）を踏まえて、次の授業における指導へとつなぐ」「一つの授業の中で行った指導（評価）を踏まえて、次の単元における指導へとつなぐ」など、様々なやり方がある。特に、漢文の入門期のように「学習の基盤となる知識を、生徒に着実に理解させることが求められる時期の指導」においては、学習内容に対する生徒の理解の状況を細かく把握しながら授業を進めていくためにも、「１時間の授業時中で、指導から評価へ、評価から指導へとつなぐこと」に留意したい。

○「普段の指導」において、着実に学習評価の場面を位置付ける

教師は、生徒の様々な反応を手がかりにして、自分が考えていた授業展開を適宜修正しながら授業を進めていく。例えば、「指導した内容に対して生徒が十分に理解をしていないようなので、（授業時の）その場で新たな学習活動（学習課題）を設定し、生徒に取り組ませる」「指導した内容に対して生徒が十分に理解をしていないようなので、次の時間にもう一度その学習内容を取り上げる」などの場合、傍線を付した部分は全て、評価に相当する。また、波線を付した部分は全て、評価を踏まえた指導に相当する。このように、「指導したことを評価し、それを踏まえて次の指導を行う」ということは実は特別なことではなく、「普段の指導」の中で教師が当たり前に行っていることである。しかし、それらのことを、教師自身が自己の経験や勘に任せ、言わば「自然に」行っているままであると、「一番重要な評価の場面」が流れてしまうこともある。授業において着実に学習評価の場面を設けるには、まずは、「教師が当たり前に行っている指導と評価」（教師自身が自己の経験や勘に任せ、言わば「自然に」行っている指導や評価）を、「意図的・計画的な指導や評価」（授業における目標を明確にし、その目標のもとに意図的・計画的な指導を行い、目標に照らして生徒の学習状況がどのようであるのかを着実に見取るという指導と評価）とすることが肝要である。

また、「評価をするのだから、ワークシートを作らなくてはいけない」「評価をするのだから、小テストを作らなくてはいけない」などと短絡するのではなく、評価の材料や評価の方法には、図５（Ｐ13）のように、様々なものがあることも再確認したい。評価にはいろいろな材料や方法があると確認することは、評価に対する教師の心情的な負担を軽減させることにつながる。例えば、教師は「普段の指導」の中で、机間指導、ノート点検、生徒の様子の観察などを当たり前に行うが、教師に十分な経験と技量があれば、それらからも生徒の学習状況を見取ることはできる。

事例１ では、評価の材料や方法を「授業時に机間指導をしながら、生徒の行動を観察する」「授業時に机間指導をしながら、生徒のノートへの記述を点検する」「授業後に、ノート・ワークシートへの記述を確認する」とし、まさに「普段の指導」の中で、指導と評価の一体化を目指した実践である。しかし、「普段の指導」であっても、事例１のように、授業者が指導と評価に関して明確な意識をもって授業に臨むことで、授業における学習効果は大きく変わる。教師が「普段の指導」で自身が行っている指導や評価を捉え直し、授業の中で意図的・計画的に学習評価の場面を

位置付けていくことは、生徒が着実に力を付けていく授業の実現につながる。

２ その他の工夫

○ 生徒の実態に応じて指導過程を細分化し、生徒の学習状況を丁寧に把握する

事例１では、１次において、「正しい読み方を把握する学習」に入る前に、「訓読する順序を把握する学習」を入れ、本文の横に生徒がどのように読み順を数字で記入しているのかを、教師が点検している。このステップがあることにより、生徒全員の学習状況の「足並み」を揃えた上で、「正しい読み方を把握する学習」へとつなぐことができている。また、２次においては、「書き下し文を書く学習」に入る前に、「置き字、助詞、助動詞に○や□などの印を付ける学習」を入れ、生徒がどのようにそれらの符号を付けているのかを教師が点検している。このステップがあることで、生徒全員の学習状況の「足並み」を揃えた上で、「書き下し文を書く学習」へとつなぐことができている。

このように、事例１では、漢文の入門期の指導であることから、指導の過程をスモールステップの考え方で分割し、生徒の学習状況を細かく見取りながら丁寧な指導を行っている。学習評価の点からこれを捉え直せば、「漢文を読んだり、書き下し文を書いたりするための基本的なきまりを理解している」という知識・理解に関する評価規準を、「訓読する順序を正しく理解している」「正しく音読ができている」「置き字、助詞、助動詞を正しく理解している」「書き下し文を書くためのきまりを理解している」という四つに分けて用いている、ということである。事例１の「２(5)指導と評価の計画」では、知識・理解の評価場面が多すぎるように見えるかもしれないが、実はこれは、一つの事項を指導する過程を四つに分け、それぞれの過程における生徒の学習状況がどのようであるのかを見取っている、ということである。

「生徒の実態に応じた指導」を考える場合、例えば、学習目標として設定する内容自体を「生徒の実態に応じた」ものに設定する、という方法をとることがある。たしかに、それも一つのやり方ではあるが、学習目標として設定する内容自体はそのままにしつつ、事例１のように、指導の過程や学習課題を工夫することで「生徒の実態に応じた」指導とする、というやり方もある。